

四羽の小鳥

坪田 譲治



新潮社版

鳥の小の羽四

坪田讓治

新潮社版

昭和二十四年九月六日 印刷
昭和二十四年九月十日 發行

定價 貳百貳拾圓
地方賣價 貳百參拾壹圓

著 者 坪 田 讓 治

發 行 者 佐 藤 義 夫

東京都新宿區矢來町七十一番地

鳥 小 の 羽 四

發 行 所

株式會社 新 潮 社
東京都新宿區矢來町七十一番地

電話九段(33)一四六番・一四七番
一四八番・一四九番
振替 東京八〇八番

塚 田 印 刷

目次

主の祈り.....	五
社会の制裁.....	四三
手紙事件.....	九三
公園にて.....	一六三
りすクラブ.....	二〇一
和吉組.....	二六一
櫻子は見る.....	二八四
禾樹園にて.....	三〇一

裝本・さしえ 小穴 隆一

四羽の小鳥

主の祈り

「天にまします我らの父よ、願わくはみ名を崇めさせたまえ。み國を來たせたまえ。みこゝの天に成るごとく地にも成させたまえ。我らの日用のかてをきょうも與えたまえ。我らに罪を犯す者を我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ。我らをこゝろみにあわせず、惡より救い出したまえ。國とちからと榮えとは、かぎりなく汝のものなればなり。」

三牧氏の家は牧師の家である。だから、けさ、食卓に向かうと、四人の子供と共に三牧夫妻は声をそろえて、この主の祈りとなえた。四人の子供というのは、姉と三人の弟である。弟のうち、上は中学四年で、下のふたりは小学生である。その小学四年生の松男が一年生の杉男と、食後に議論を始めた。

「オウ、杉男、日用のカテをきょうも與えたまえっていうの、なんだかワケ知ってるかい。」

「ウン。」

「じゃ、言ってみろ。」

「ウン、きょうもゴハンを食べさせて下さいっていうんだよ。」

「そうだ。よく知ってるな。それじゃ、杉男はだれにそう言ってるんだい。」

「神さまさ。わかつてるじゃないか。」

「へえ——、神さまに言ってるのかい。だって、おれたちにゴハン食べさせてくれる人、おかあさんじゃないか。」

「じゃ、にいちゃんはだれに言ってるんだい。」

「にいちゃんか。にいちゃんはだな、そのゴハンをつくってくれる人にさ。」

「じゃ、おかあさんだね。」

「ウ、ン、おかあさんにおとうさんに、それから配給所にお百姓に——。」

「それだけ？」

「そうさあ。」

「だって、雨が降らなかつたらお米できないっていうんだらう。」

「雨なんかヒトリデに降るよ。」

「だって、大風が吹いたらどうする。」

「仕方がないよ。」

「じゃ、お日さまが照らなかつたら？」

「お日さまなんか、照るなど言つても朝になると照つてくるよ。」

「それが神さまの力なんじゃないか。ボク日曜学校で教わつたんだ。」

こんな議論をそばで聞いていた姉の櫻子がその時、言葉を添えた。

「そうですね。杉男ちゃんはいゝことを言つたわねえ。神さまの力がなかつたら、日も照らないし雨も降らないし、それこそお米一ツブだつてできはしないのよ。」

これを聞くと、しかし松男はだまつていなかった。

「じゃねえさん、お百姓がイネを植えなかつたらどうする？」

「お百姓が植えなかつたら、私たちで植えればいいじゃないの。」

これには、松男ちよつと返答に困つた。そこですかさず、杉男がつつこんだ。

「にいちゃん、神さまが日を照らさなかつたらどうする？」

松男は負けそうになつたので、ハラを立てて、大声を出した。

「バカヤロウ、お日さまなんか、ヒデリに照るんだつて、さつき言つてやつたじゃないか。わかない奴だなあ。」

「だつて、それが神さまの力だつて、ボクも言つたじゃないか。」

杉男もまけておらず、大声で答えた。

松男はしばらく考えていた。そして姉に向かって言い出した。

「神さまがゴハンを食べさせて下さるんだったら、ボクたち何もしなくなつていゝじゃないか。毎日毎日お祈りはかりしてりやいゝじゃないか。」

姉は答えた。

「それじゃダメなのよ。みんな、それぞれ神さまからさずかった仕事があるんです。それをしなくちゃ、神さまがゴハンを下さらないの。」

「仕事をするんだったら、何も神さまにお願いすることはいらないじゃないか。その仕事がお金をもうけさせてくれるし、そのお金でお米を買えばいゝ。」

どうも姉の旗色が悪くなつて來た。そこで今度は姉がハラを立てた。

「ダメッ。松男ちゃんは今チャばかり言うから、てんでお話にならないわ。」

これをきくと、松男が追撃にうつった。

「だって、お、姓がお米をつくるころ、ボク見たことあるけど、神さまが太陽を照らすところ、一ペンも見たとないんだもの。」

「まあ——。」

姉の櫻子はあきれてしまった。

「そんなムチャクチャを言つて、あなた聖書を読みかされたこと、今まで一度もないようなのね。もう何年も日曜ごとに日曜学校に出席していてさ。そんなこと言つてると、おとうさんにどんなにしかられるかわからないわ。」

櫻子は立つて行つてしまった。松男も杉男も黙っていた。しかし松男はどうやらギロンに勝つたような氣がして満足した。そしてまた弟に言うのであつた。

「な、杉男チャン、我らの日用のカテをつてところ、これから、我らに三合の配給をつて言うことにしないかい。」

しかし杉男は承知しなかつた。

「イヤだい。」

「ナゼ、三合配給があつたらいいぞう。」

「ぞつて、おとうさんにしかられるよ。」

「ウ、ン、口のウチで言うのさ。わかりやしないよ。」

「イヤ——。」

杉男はきかなかつた。そこで松男はちよつと考えていて、いゝことを思いついた。

「な、杉男チャン、ねえさんが畑を起こしているだろう。あそこへ、いゝものまかないか。」

「いゝものつて？」

「いゝものさあ。食べられるものをさ。來年になると、マメがなるんだよう。ソラマメにエンドウ。いつて食べるとうまいよう。」

「だつて、ねえさん、もう何かタネをまいたんじゃないか。」

「まいたつていゝさ。キット花のタネをまいたんだから、はえて來たら、引っこぬいてしまやいよ。」

「ねえさん、おこるよ。」

「ウ、ン、まだ何がはえてるかわからないウチにぬいてしまうのさ。そのうちねえさん、おどろくよ。あれえ、草花の代りにマメがはえて來た。やつぱり神さまが、そうして下すつた。そんなことを言うかもしれないね。」

杉男のキモチを引き立てようと、松男はこんなにおどけて見たが、杉男は黙つていて、目をパチクリやつているばかり、立ち上ろうとしなかった。そこで松男は台所へ出かけて、母に話しかけた。

「おかあさん、エンドウか、ソラマメがありませんか。」

「豆？ 豆をどうするんですか。」

母がたずねた。

「ウン、ボク食糧の増産をはかるんだ。」

松男が言っているところへ、杉男がかけて来た。

「おかあさん、にいちゃんね。」

言おうとするので、松男はまたハラをたてた。

「このヤロウ、だまつてろ。言ったらヒドイぞ。」

そこで杉男は母に告げ口するのをやめ、姉のところへ行く様子をした。

「じゃいゝや、ボクねえさんにアトで話してやるから。」

そう言うのである。そして遠いところへ行つて、大声で呼んだ。

「にいちゃんねえ、ねえさんの起こした畑に豆をまくって言っていますよう。ねえさんの花の種なんか、メバエを引っこぬくって言っていますよう。」

これで、とうとう松男が豆の種をもらうことはオジャンになつてしまった。しかし松男は思ひきれなかつた。だって、先生は言っていた。

「政府の復興五カ年計画によると、昭和二十七年、今から四年後には米が六千八百万石、ムギが

二千四百五十万石生産される。それでもまだ主食を二千六百万石も輸入しなければならない。二千六百五十万石と言うのは、トンに直すと、四百万トンである。一万トンの船に一万トンの米がつめるとすれば、そんな船が四百セキいる。ところがわが國の汽船全部を合わしても、おそらくその半分くらいしかつめない。これで見ても、その四百万トンというのがいかに大きな分量であるかということがわかる。」

松男はこれを聞いて、実は大いに感奮していたのである。だから、どうしても豆をまきたい。たとえ一粒でもまかなければならない。神さまなんかをタヨリにしているワケにゆかない。それでも、こんなユキサツになつては仕方がない。

「いゝや、日曜におじいさんとこへ行つて頼むからいゝや。」

そうヒトリゴトを言つて、ナラヌ堪忍を堪忍した。

ところで、その翌日が日曜だつた。日曜学校の授業がすむと、松男はサツサとヒトリで用意をした。おじいさんのところは二里ばかりのイナカで、沼のほとりの小高い丘の上にあつた。そこでおじいさんとおばあさんは物置のような小さな家に住み、丘をひらいて少しばかりの果樹などをつくつていた。だから、松男はカラのカバンをかけ、ナイフなどをポケットに入れた。カバンには歸りにナシやブドウを入れてもらわなければならぬし、ナイフはそれで、ナシの木の下で、

ナシをむいて食べなければならなかった。それにフウトウ二つの準備も忘れなかった。その中にソラマメとエンドウのタネをもらうためであった。

だれにもだまって、いざ出かけようと、玄関でクツをはいてると、中学四年の兄、清志がブラリとそこへ出て來た。

「どこへ行くんだい。」

「いいとこ。」

「またおじいさんだろう。」

松男はニツコリした。

「おじいさんなら、おれも行くかな。」

黙って立っていると、清志はそのまゝゲタを引っかけて外に出た。もう日曜の礼拝が始まる時間で、そんな時外出するとしかられるのである。それに足弱の杉男なんかについて來られると大変だ。

家を出て五分ばかり歩くと、清志が、

「しまった！」

と言って立ち止まった。

「どうしたの？」

「本を忘れちゃった。おれ、きょうおじいさんとこで本を読むのを楽しみにしていたんだがなあ。」

「とってくればいゝじゃないか。」

「そうだなあ。」

清志はちよつと考えるふうをしていたが、

「じゃ、とってくるからな。松男、先へ行つてくれ。」

そして清志は家のほうへ急いだ。松男はそこが丁度川岸だったので、岸にしゃがんで、水の流れを見ていた。この流れが流れ流れて幾つかの村を過ぎて、川しもの沼に入るのである。

すると、間もなくそこへ学生が三人、タバコをすいすいやつて來た。キシヨウを見ると、清志と同じ中学だ。

「坊や、何してんだい。」

そのひとりが言葉をかけた。

「何もしてないよ。」

「じゃ、どうしてそこにしゃがんでるんだい。」

「待つてんだ。」